

日々発する言葉によって、自分の心境を良くし、周囲を明朗にすることができます。しかし、発し方から周囲に不快感を与えてしまうのも言葉なのです。今週はM社長の体験を例に、言葉の発する影響力について学びます。

先週配信された「今週の倫理」では「暗い、ゆううつなことを言い続けると、暗く、ゆううつな事態が起こり、明るく朗らかなことを言い続けると、明るく朗らかな事態が起こる」と倫理研究所の第二代理事長・丸山竹秋の文章を紹介しました。

皆さんは経営者として、普段、社員に対してどのような言葉を用いているでしょうか。社員が発する以上に、経営者の発する言葉には重みがあります。だからこそ、言葉の使い方次第で、職場環境が良くも悪くも変わるといえるでしょう。

ユーモラスなM社長は、職場内を明るくしたいという思いから、社員の誰かをネタにし、職場内に笑いをもたらしていました。社員皆が笑ってくれるので、自分の発する言葉が場を和ませているのだと思っていました。

しかしある日、社員から「社長、人のことをネタにするのを止めてくれませんか。皆、気分を害していますよ」と言われたのです。何のことかわからないM社長は、「何か悪いことを言ったかな」と尋ねると、その社員は「社長の冗談は、誰かの失敗や欠点をネタにする。皆、表面的には笑っていますが、言われた本人は傷ついてい



7月のテーマ | 言葉の力

前向きな言葉で 周囲を明朗にする

ますし、場の雰囲気も悪くなりました」と言うのです。

M社長は、社員からはつきりと言われ、驚きました。「確かに、私も自分の短所をネタにされたら嫌な思いをする。自分は社長という立場で、社員を話のネタにしてしまった。悪いことをしたな」と反省しました。そして、翌日の朝礼の際に、社員に「今まで嫌な思いをさせて申し訳なかった」と率直に詫言ったのです。

すると、社員から「社長、いつも私たちを笑わせてくれて、ありがとうございます。社長は社員をネタにしても、十分に面白いですよ」と言われ、M社長は顔を真っ赤にして照れました。そして「今、私はタコミたいだね」と口をすぼめて、社員の笑いを誘ったのです。

言葉には大きな力が秘められています。言葉の発し方によって、人を活かすことも、不安にさせることもできます。だからこそ、言葉を選ばなくてはなりません。これまでM社長が良かれと思いついて発していた言葉は、結果として、人を傷つけ、職場の雰囲気を壊していました。そのことにM社長が気づき、自らを改めたことで、本来、求められる明るい職場環境に変えてきました。

人は一日を通して、誰の言葉を多く聞いているかというところ、それは自分の言葉です。自分が日々発する言葉は、自己の状態を良くも悪くもします。だからこそ、まずは自分自身が明るく前向きな言葉を発しましょう。自己の発する言葉で周囲を明るくし、さらには家庭を、職場を、地域を明るく前向きなものにしていきたいものです。